

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04757

研究課題名(和文) 若手教員の初年度授業力充実をめざす教員養成教育についての研究～実技教科を中心に

研究課題名(英文) Research on teacher training education aiming to enhance the teaching ability of young teachers in the first year:Focusing on practical skill subjects

研究代表者

隅 敦 (Sumi, Atsushi)

富山大学・学術研究部教育学系・教授

研究者番号：30515929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：授業力を「子供に学力をつけるために教師に求められる力」と規定し、小学校の若手教員が初任1年目の段階から教科学習の授業力を発揮させることができるように、教員養成教育の段階における実技教科の指導内容の充実に焦点を当てた基礎的な研究を行った。まず、若手教員が配属されている小学校を訪問し、教員養成教育の段階での学びがどのように生かされているか、授業記録を行い、それを元に聞き取り調査を行った。次にそこで得た課題を整理し、講義等で求められる内容についての検討を行い、若手教員が実技教科において可能な限り授業力を発揮できる要件を整理し、学部における対象講義のシラバスの改善に反映させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、教職1年目の初任者指導では実技教科にほとんど研修の機会を与えられない実態や指導しない教科が存在する実態を踏まえた上で、教員養成段階において実技教科のあり方を理解させ、身につけておくべき内容について明らかにしようとしてきた。若手教員に対する授業記録や聞き取り調査の分析を初任段階から行ったことで、実技能力の向上だけ行えばよいとは言えない事実を把握し、教員養成教育の段階での実技教科のシラバスの見直しと改善を段階的に行った。今後、該当の学年の新規採用教員が、実技教科の授業力を発揮することで、経験年数が少なくても児童の理解力に差がなくなることが期待している。

研究成果の概要(英文)：Teacher training is provided so that the teaching ability is defined as "the ability required for teachers to give their children the ability to learn" so that young elementary school teachers can demonstrate their teaching ability from the first year of their first year of teaching. The basic research focused on the enhancement of the teaching contents of the practical skill subject at the stage. First, we visited an elementary school to which young teachers are assigned, and made a class record of how the learning at the stage of teacher training was put to good use, and conducted an interview survey based on it. Next, the issues obtained there are organized, the contents required in the lectures, etc. are examined, and the requirements for the young teachers to exercise their teaching power as much as possible in the practical skill subject are sorted out to improve the syllabus of the target lecture in the faculty. Reflected.

研究分野：美術科教育

キーワード：若手教員 実技教科 教員養成教育 シラバス改善

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

全国の学校教育の現場で熟達教員の大量退職時代を迎え、若手教員の割合が増え続けその役割は増加する一方である。申請者が行った図画工作科の授業研究校の指定を受けて共同で研修を積んだ20歳代の若手教員と50歳代の熟達教員に対する聞き取り調査を行った研究¹では、世代間で図画工作科の教科観の受け止めに相違があることが判明している。熟達教員の中には、当時の免許法の関係で履修していない者も存在していることから、研修を積んだことで、この教科に対する教科観を新たに確立していることが分かった。それに対して、若手教員は、学部時代に学んだ図画工作科の教科観を研修によって再確認している事実も把握してきた。つまりは、教員養成教育の段階での影響が、卒業後30年間も続く可能性があるということである。

そもそも、実技教科は、主要教科よりも子供たちの好きな教科であるという調査結果(ベネッセ教育総合研究所2008)²がある。しかし、学校によっては、家庭科や図画工作科の授業を削ってでも全国学力・学習状況調査のための対策をしているという報道(2016年9月29日NHK)もあり、子供のための実技教科としての存在意義を認識した教師の育成が教員養成段階から求められるところである。

2. 研究の目的

本研究は、小学校の若手教員が初任1年次の段階から教科学習の授業力を発揮させることができるように、授業等の調査分析を行い、その研究成果を踏まえて、大学の教員養成教育の段階でなすべきことについて再考し、最終的にはその結果をシラバスの改善等に生かすことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、以下の研究方法で小学校の若手教員が初任1年目の段階から実技教科の授業力を発揮させることができるように、特に教員養成教育の段階における指導内容の充実に焦点を当てた。

若手教員の実技教科の授業の動画撮影を行ってトランスクリプトを作成し、教師の発話と子供の活動に注目して分析を行う。

記録動画を視聴しながら実技教科の指導に関する聞き取り調査を行い音声記録を取る。

データに変換した音声記録の質的データをQDAソフトに整理し、教員養成教育の段階で必要な実技教科に関するキーワードを抽出して、シラバス改善に求められる要件をまとめていく。

実技教科の講義シラバスに成果を反映させ実施し、見直しを行って改善点を整理する。

4. 研究成果

(1) 平成29年度(2017)研究1年目

先行研究の把握と分析

前述の「教員養成等の改善に関する調査研究」(2015)に基づいて、教員養成教育に求められている要件についての整理を行い、関連した研究文献を収集し、本研究に活かすことのできる事例および理論等を把握した。

前回の研究を踏まえて、授業内における模擬授業の開始

授業の構成は、1. テーマに基づく理論説明(約15分~30分)。2. 模擬授業、(画像およびタブレット端末による動画記録)と共に、(約30分~45分)板書の代わりにミニホワイト

トボードを使用。3．動画記録を元にした振り返りと課題の共有および補足説明。4．授業レポート（約 15 分）＊ 毎回模擬授業は、第 1 回におけるガイダンスを経て残り 14 回は班ごとに順に教師役と児童役を決めて行った。受講学生を 4, 5 人ずつの 8 グループに編成し、第 1 回は筆者が示範をし、それ以降は、14 回の模擬授業を教師役と児童役を交代で行わせることにした。タブレット端末を各班に 2 台渡し、1 台では教師役の学生の様子を撮影し、もう 1 台は、教師役の学生が児童役の学生の様子や作品を撮影することができるようにした。

研究対象の若手教員の授業記録

本学部の卒業生が在籍する調査対象校（富山県内）で、教員歴 4 年目、3 年目、2 年目、1 年目の若手教員を対象にそれぞれ 1 年に 1 回程度実技教科を指導に関する聞き取り調査を行った。次に、一人につき年 1 回ないし 2 回実技教科の授業の参与観察を行い、動画撮影を行った。

聞き取り調査およびビデオ撮影記録のテキストデータ化

データ分析

聞き取り調査のデータは、データ処理を通してキーワードを抽出しながら、トランスクリプトを作成し授業の中で若手教員がどのような視点で授業を作り上げていくのか、教員の発話を元に関心の高い内容を焦点化していった。

データ分析の結果のまとめ

若手教員の初任段階における実技教科の授業の動画記録における教員の発話を含む行為と子供の反応に注目しながら分析を行い整理した。また、特に 2 年目以降の教員に対しては、教員養成教育の段階で学んだ内容について、採用されてから受けた助言や他教科の指導技術の応用等と分別しつつ、焦点化を行った。

研究対象者とデータ分析の結果を共有しながら聞き取り調査の実施

研究対象者と共に動画分析の結果について確認しながら、次の視点等で聞き取り調査を行い、教員養成段階での既習事項との比較を行った。

- ・各実技教科の教科としての意義について（教科観）の理解状況。
- ・初任段階で求められる授業構成員。
- ・指導上必要な教師の技能（材料、用具の扱い方を含む）。
- ・授業準備（普通教室、特別教室、体育館、運動場等における環境構成を含む）に関すること。
- ・児童に対する実技における指導技術（生活指導的な内容を含む）。
- ・実技教科以外の教科の指導と重複する指導法等の流用の可能性。

QDA ソフトに整理しながらの質的な分析

質的分析を行うために専用ソフトを用いて効率よく情報を整理しながら、教員養成教育時に求められる要件を抽出した。

1 年目の研究成果をもとにした講義シラバスの内容の見直し

平成 30 年度学部 3 年対象前期講義「図画工作科教育論」および学部 2 年対象後期講義「図画工作」のシラバスの中に改善点を盛り込んでいった。この年度の学生アンケートでは、単に模擬授業の導入が結果として学生の満足度の向上につながっていた。

学会等での発表

美術科教育学会北海道大会で発表予定であったが、勤務先大学の卒業式と日程が重なり発表中止した。

平成 29 年度と同じ手法で、1 年目に指導していない実技教科も含めた記録及びデータ分析と聞き取り調査

講義シラバスの内容の見直しを行い、他の実技教科担当教員への情報提供

平成 31 年度学部 3 年対象前期講義「図画工作科教育論」および学部 2 年対象後期講義「図画工作」の中に改善点を盛り込んでいった。

平成 30 年度のシラバスの改善

若手教員の採用 1 年次の授業分析から、導入部の発話が重要視されることがわかり、特に導入部と展開部の発話に着目して、発話の種類のみならず、現行の学習指導要領に基づく評価観点をクロスさせて分類して分析を行ったことで、導入部では「指示」や「示範」の発話の質が問われていることが分かった。さらに、たとえ導入部の発話が簡略化されていたとしても、展開部において、評価観点に関わる「指示」や「質問」等の発話を行うことで、児童の活動を促し、「同意」の発話で評価を行うことができることも分かった。したがって、導入部の教員の発話の質と量は、実技教科において、展開部の児童の活動に少なからず影響を及ぼしていることが分かった。

そこで、「発話チェックカード」を用いて、模擬授業後の振り返りの際に、内容をチェックさせることにした。また、教師役の学生に対する事前指導（授業日前の昼休み等）を充実させることで、授業内で指導すべき技能について誤りが無いように配慮した。

学会等での発表

「若手教員の初年度授業力充実をめざすために～導入部における 発話の有効性について」大学美術教育学会岐阜大会，2018 年 9 月 22 日

学会論文³での発表

(3) 令和元年度(2019) 研究 3 年目

平成 30 年度と同じ手法による 2 年目に指導していない実技教科も含めた記録及びデータ分析と聞き取り調査継続

前年度までの 2 年間の調査研究で得た知見を元に調査対象者在籍校に出向いて、聞き取り調査を依頼し、図画工作科以外の教科の指導へ生かせる点や、子どもの見方の深まりなどに相当する内容についても情報を収集した。

講義シラバスの内容の見直しを行い、他の実技教科担当教員への情報提供

令和元年度の分析成果を元に、学生の模擬授業内における振替返りの精度を上げるために教師役の学生にウェアラブルカメラを装着してその動画を元に児童役の学生を見る視線を含めて発話を振り返ることができるようにした。

実技教科全般に生かせる汎用的なシラバス作成のための要件を整理する

学会等での発表

「若手教員の初年度授業力充実をめざすために～導入部における発話の有効性について」第 58 回大学美術教育学会「岐阜大会」2019 年 9 月 22 日

学会論文での発表

論文は令和 2 年度に関係学会誌に投稿予定。

(4) 本研究の成果と課題

本研究の成果は、若手教員の実技教科の授業分析や聞き取り調査の分析を行い、その分析結果を踏まえて、大学の教員養成段階のシラバスの改善を行うという点については、概ね達成できた

と判断している。特に実技教科全般を研究対象としたことで、若手教員が採用1年次の新採研修のプログラムに実技教科が組み入れてなかったり、先輩教員から授業を見せてもらう機会を得られないまま試行錯誤をしながら指導を行っていたりする現状を前回の研究同様に確認しながら、学部の講義のシラバスの改善に反映させてきた。

ただし、今回の研究で課題として残った点は2点ある。研究1年次の平成29年度に学部の教員養成教育の3年で模擬授業を経験した元学生に対して、若手教員の1年次を迎えた令和元年度に、その成果について、研究対象者全員に確認ができなかった点である。原因は、新型コロナウイルス感染防止のために聞き取り調査が中断し、2月下旬から3月上旬にかけて学校等に連絡が取れなかったことにある。また、若手教員の授業の発話分析を実技教科全般で行い、分析をデータ化にしても学内の他の実技教科担当の教員に情報を十分に提供できなかったことも課題となっている。いずれにしても、今回の研究で得た研究成果は、今後も学部の教員養成教育に反映させ若手教員育成に資することに活用する予定であり、さらに学会における発表や誌上発表において広く社会に広めて行きたい。

1 隅敦「図画工作科に対する教科観の相違と教員養成の果たす役割 —20歳代と50歳代の現職教員対象の聞き取り調査をもとに—」、『美術教育学第36号』美術科教育学会, pp.223-238, 2015 (査読有)

2 「学習基本調査・国際6都市調査 [2006年～2007年]」ベネッセ総合教育研究所,
<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3213>, 2020年6月12日取得

3 隅敦「採用1年次の若手教員の図画工作科を含む実技教科授業の導入部における発話の有効性について」, 『美術教育学第40号』美術科教育学会 pp.217-235, 2019, (査読有)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 隅敦	4. 巻 40
2. 論文標題 採用1年次の若手教員の図画工作科を含む実技教科授業の導入部における発話の有効性について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術科教育学会誌「美術教育学」	6. 最初と最後の頁 217 235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 隅敦
2. 発表標題 若手教員の初年度授業力充実をめざすために～教員養成教育における図画工作科指導で求められること
3. 学会等名 第57回大学美術教育学会奈良大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 隅敦
2. 発表標題 若手教員の図画工作科授業力の向上を支えるために-模擬授業を組み込んだシラバスへの改善の試みを通して-
3. 学会等名 第40回美術科教育学会滋賀大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	竹内 晋平 (Takeuchi Shinpei) (10552804)	奈良教育大学・美術教育講座・准教授 (14601)	

